

## 日本におけるワイルド翻訳について

佐々木 隆

(武蔵野短期大学専任講師)

ワイルドの翻訳について考える時、ふたつの考え方がある。ひとつはワイルド自身の翻訳。ワイルドはセバスチャン・メルモスという偽名のもとに翻訳活動を続けたり、『サロメ』を最初フランス語で発表しているが、これも広い意味で翻訳と考えることができる。もうひとつは、ワイルドの作品を日本語に翻訳するという問題である。ここでは、後者の問題に絞って、ワイルドの作品を日本語に翻訳する時に生じる問題について、特に、日本におけるワイルド受容史の観点から考察していきたい。

ワイルドの作品が初めて紹介されたのは1892年(明治25)5月のことで、“The Soul of Man under Socialism”が『自由』という新聞の社説に「美術の個人主義」と題して紹介された。当時の時代状況を考慮すると、ワイルドについては、「ワイルドの生きた時代と当時の日本の時代状況」、「ワイルドの創作のジャンル」という2つの問題点が上げられる。この2つの問題点を考えるにあたり、同じイギリス文学の中で最も日本に受容されているシェイクスピアと比較してみたい。

まず第1点について言えば、ワイルドはシェイクスピアのように古典になっている作家とは違って、当時の日本にとっては同時代人であったことが大きな特徴である。単純にシェイクスピアとワイルドを比較しても、情報量が圧倒的に違う。ワイルドと同時代であるバーナード・ショーについても同じことが当てはまる。

第2点について言えば、ワイルドが評論家であり、小説家であり、詩人であり、劇作家であることだ。シェイクスピアにはソネットや詩もあるが、シェイクスピアの劇作は当時の演劇改良運動も大きく影響して、坪内逍遙や森鷗外によって翻訳され、上演されるようになった。ワイルドの代表作である『サロメ』(1891年、フランス語:1894年、英訳)は、1907年(明治40)に森鷗外によって紹介されたが、2年後にはやはり森鷗外によって翻訳されている。『サロメ』が戯曲として命を与えられ、日本で初めて上演されたのは1913年(大正2)のことで、この年にまづアラン・ウィルキエー座によって『サロメ』が上演されたが、日本人の手による初演は松井須磨子主演による芸術座の上演であった。翻訳による全集に目を向けてみると、1920年(大正9)には『オスカー・ワイルド全集』が世に登場したのだ。これはかなり早いことである。ちなみに、坪内逍遙によってシェイクス

ピアの全訳が果たされたのは1928年(昭和3)のことである。また、ワイルドと同時代人のバーナード・ショーとイブセンについて見てみると、ショーについて言えば、1966年(昭和41)に『バーナード・ショー名作集』がまとまった形でようやく出版されたが、全集はまだ出版されていない。イブセンについて言えば、受容の時期はワイルドとさして変わらぬものの、戯曲全集が出版されたのは1989年(平成1)のことである。

シェイクスピアが劇作の中で様々な登場人物を生み出し、「万人の心を持つ」と言わしめたのに対して、ワイルドはその創作のジャンルの多様性において「万人の心を持つ」と言えるのではないだろうか。

外国作家の受容を考える時、翻訳全集出版が受容の終了ではない。むしろ、これからが真の意味での受容となるのではないだろうか。例えば戯曲家としてのワイルドを考えてみても、上演はどうだろうか。『サロメ』は比較的良好に上演されるものの、ほとんどがオペラである。また、『サロメ』以外の上演が極めて少ないことも気になることである。何故本来の演劇としての『サロメ』よりもオペラの上演の方が多いのだろうか。また、これは日本だけの現象なのだろうか。

『社会主義下の人間の魂』という評論で日本に紹介されたワイルド。『サロメ』、『幸福な王子』、『ドリアン・グレイの肖像』や『嘘の衰退』など、ワイルドはさまざまな仮面を持っている。我々はワイルドの仮面に欺かれ、彼のとらえ方を見誤っているのだろうか。それともすべてが仮面ではない素顔なのだろうか。最後にワイルドの言葉を引用したい。

私は詩人になり、作家になり、劇作家になって、なんとかして有名になる。そうでなければ、悪名高くなってみせる。あるいはたぶん、静かに、何もしないであろう。万事は神まかせ、なるようになれだ。

